

# 大学史資料センターのこれまでとこれから

大日方 純 夫

## 一 大学史資料センターの歩み

大学史編集所が大学史資料センター（以下、資料センター）に改組改称されたのは、一九九八年六月一日のことである。資料センター規程はその「目的」をつぎのように規定している。

センターは、本大学の歴史、創設者大隈重信および関係者の業績を明らかにし、これを将来に伝承するとともに、比較大学史研究を通じて、本大学の発展に資することを目的とする。

すでに私は、本『記要』第四二巻（二〇一一年三月）において、一九六一年一月、資料センターの前身、校史資料係が図書館のなかに設置されて以来五〇年の経緯を、つぎのように概括した。

一九六二年の創立八〇周年を前にして、大学に関する歴史資料を収集・管理するため、校史資料係が設置された（自

校史資料の収集・管理ⅡA)。その後、一九六三年一二月、図書館内の係から教務部所管の校史資料室に改組移管され、このとき社会科学研究所から大隈重信研究を引き継いだ(創立者に関する研究ⅡB)。一九六五年二月、教務部所管の校史資料室から、総長室直轄の校史資料係となり、学苑史の編纂を事業目的に追加して(年史の編纂ⅡC)、あわせて『早稲田大学史記要』を創刊した。一九六九年六月、『早稲田大学百年史』の刊行に向けて校史資料係は大学の附属機関として独立し、大学史編集所となった。百年史の編纂・刊行と、大学史および大隈重信に関する資料の蒐集を中心業務にすることとなったのである。『早稲田大学百年史』は一九七八年に第一巻を刊行し、一九九七年九月、全八巻と資料集一巻の刊行をもって完結した(年史編纂事業の終了)。

こうして、Aを基本として発足し、これにBが加わり、やがてCが中心業務となったが、その終了をもって大学史編集所は資料センターに発展的に改組されたのである。資料センターはA・B(創立者だけでなく関係者も追加)に、新たに比較大学史研究(D)を加えるかたちで発足したのである。中心業務は、①大学の歴史を明らかにすること(A)、②創設者・関係者の実績を明らかにすること(B)、③比較大学史研究(D)の三つとなり、このうち①②については「将来に伝承すること」が課題となり、さらに①②③を通じて「大学の発展に資すること」が目的となった。したがって、センター規程第三条には、従来型の業務を継承する「一、資料の収集、整理および保存」と「二、資料の調査、研究およびその成果の発表」だけでなく、新たに「三、講演会、公開講座、シンポジウム等の開催」、「四、資料の公開およびレファレンスサービス」、などが掲げられた。大学の窓口としての性格が強くなったのである。

資料センターは以来一六年を重ねて、本年度に至った。その間、恒常的な業務として一貫して担ってきたのは、資料の受入れと、調査・取材への協力などのレファレンスである。同時に、展覧会・講演会などの普及業務を継続的に展開してきた。しかし、資料センターの業務は、時期を重ねるなかで対応の推移と変化を示してきた。一六年間にわ

たる資料センターの歩みを、時期を追ってみておくことにしよう。

(1) 一九九八〜二〇〇二年度―展覧会・講演会の開催と研究プロジェクトの推進

この時期は、展覧会(a)と講演会・シンポジウム・座談会(b)をこまめに開催し、様々な研究プロジェクト(c)を組織した。

発足時の一九九八年度は、第一次大隈内閣成立一〇〇周年記念事業を展開し、この事業にかかわるものとして、aでは、「早稲田と自由民権」展、「大隈重信と早稲田大学史」展、「学祖大隈重信の生涯―展を開催し、他に秋季特別展「慶應・同志社・早稲田 三大学知の交流」展、「写真でみる早稲田五〇年」展、「山本忠興資料展」、「新制早稲田大学の五〇年」展、の都合七つの展覧会を開催した。また、記念事業にかかわるbとしては、シンポジウム「早稲田と自由民権」、座談会「第一次大隈内閣成立百年をめぐって」、講演会「第一次大隈内閣成立一〇〇周年記念」、講演会「早稲田と政治家・政治学」、慶應義塾・同志社・早稲田三大学シンポジウム「知の交流―志立の立場から」、などを開催した。他方、cとして、高田早苗研究が発足し、「自由民権と早稲田」研究、早稲田大学学術史研究、比較大  
学史研究の三プロジェクトの発足が準備された。

一九九九年度は、新制大学発足五〇周年をメインテーマとした催しを展開し、aでは、「新制早稲田大学の五〇年」展、「新設学部の発足と発展―教育学部・第二文学部・社会科学部・人間科学部」展を開催し、他に特別展示「大隈重信―生誕から東京専門学校開校まで」と「大隈重信 政治・教育・文明運動」展を開催した。また、bでは、「新制早稲田大学の五〇年」展記念講演会、新制早稲田大学発足五〇周年講演会、講演会、Historical Currents in American Higher Education、講演会「新制大学と『一般教育』―『アメリカ教育使節団報告書』を中心に」、座談会「新

設四学部の発足と発展」、などを開催している。そして、cの研究プロジェクトでは、高田早苗研究に加えて、「自由民権と早稲田」研究、早稲田大学学術史研究、新制大学史の研究の三つが活動を開始した。

なお、この年度より、レファレンスルームが資料センターに移管され、所蔵資料の閲覧業務を継続して行うとともに、このスペースを使って「堤康次郎関係文書」の整理を開始した。また、喜多村和之氏寄贈資料を搬入して、その整理を行うこととなった。

国会開設一〇〇年にあたる二〇〇〇年度は、「国会開設一一〇年と早稲田」、「国会開設一一〇年記念 堤康次郎資料特別展」の両展示と講演会を催し、また、理工学部で「理工学部育ての親 山本忠興資料展」、大隈記念室で「大隈重信と東京専門学校」展を開催している。

二〇〇一年度は、aとして、春季展と秋季展で「二〇世紀を拓いた早稲田人」を開催し、春季は政治家・財界人・言論人、秋季は学術・文化人を取り上げ、bでも、展示と連動して二〇世紀を拓いた早稲田人展記念講演会を開いている。また、特別展として「早稲田スポーツの育成者 沖田芳夫資料展」、ホームカミングデー参加企画として「大隈講堂切手発行記念展」と「写真でみる早稲田五〇年―懐かしのあの頃」、常設展示「大隈重信展―一八八九年大隈外相暗殺未遂事件」、を開催した。他にbとして三回にわたって私立大学研究フォーラムも開催している。また、cの高田早苗研究・早稲田大学学術史研究・新制大学史研究の三プロジェクトに加えて、別途、堤研究会が発足した。

二〇〇二年度も、展覧会aと講演会bの一体化を基本としており、春季展「東京専門学校創設にかかわった東京大卒生たち―早稲田建学の七人」と講演会・シンポジウム、秋季展「高田早苗の総合的研究」出版記念―高田早苗展」と出版記念講演会が開催されている。さらに、aとして、特別展「大隈重信展―一八八九年大隈外相暗殺未遂事件」と特別展「風刺画の中の大隈重信―明治期編」展、bとして、センター囑託による五回のミニ講義と、二回の

私立大学研究フォーラムが開催されている。また、三月、当該年度の受贈資料を紹介・展示する「受贈資料展」が開催されたが、これは、二〇〇三年度以降、次年度の春季ないし前期に開催するというかたちで、現在に至っている。研究プロジェクトは高田早苗研究と早稲田大学学術史研究の二つとなり、別途、堤研究会も継続している。

(2) 二〇〇三～二〇〇九年度―研究プロジェクトの収束と『大隈重信関係文書』の編纂開始

早稲田大学レベルでは、二〇〇〇年に創立一二五周年記念事業がスタートし、二〇〇七年、創立一二五周年記念式典が開催された。ついで二〇〇八年五月、大学理事会は二〇〇八年度からの一〇年間を目標とする大学の将来像を「Wasada Next 125」として策定し、二〇一二年度までの具体的な施策を提示した。この時期、資料センターでは、つぎのような業務を展開した。

二〇〇三年度は、aの春季展「大隈重信と維新の群像―近代日本の幕開けと新政のヴィジョン」、秋季展「中野正剛と緒方竹虎―政治とジャーナリズムの間」と、三つの特別展「明治一四年政変と東京専門学校」、「早稲田を創った人びと―鷗渡会七人組と大隈重信・小野梓」、「政党の誕生―立憲改進黨とその時代」を開催したが、bの講演会等は開催されていない。他方、この年度から、創立一二五周年記念事業の一環として『大隈重信関係文書』翻刻プロジェクトがスタートし、以後、編纂委員会が回を重ねていくこととなる。その一方で、研究プロジェクトは最後の早稲田大学学術史研究をもって収束した。

二〇〇四年度も、aについては、前年度と同様な開催形態がとられ、春季展「安部磯雄とその時代―早慶野球戦一〇〇年記念」、秋季展『大隈重信関係文書』発刊記念「大隈文書の世界―激動の時代を生きた多士済々の肉筆から、歴史の真相をひも解く」と、三つの特別展「二〇〇三年度受贈資料展」、「安部磯雄の生涯」、「山本忠興―キリスト教・

オリンピック・早稲田式テレビ」が開催された。そして、この年一〇月、『大隈重信関係文書』第一巻の刊行とあわせて、発刊記念講演会が開催され、『大隈重信関係文書』の刊行が資料センターの重要業務となった。また、展示のテーマにスポーツ関係が浮上してきていることがうかがえる。

「戦後六〇年」にあたる二〇〇五年度は、aとして、春季「戦後六〇年展① 一九四三年晩秋 最後の早慶戦」、秋季「戦後六〇年展② 野人政治家風見章の生涯」の両企画展を開催し、また、夏季展「ようこそ、大隈重信邸へ」と、早稲田大学創立一二五周年記念企画として、特別展「西田修平と友情のメダル」を開催した。他方、展示と連動した講演会等の企画、すなわちbは行われなくなった。

二〇〇六年度は、aとして、春季展「土門拳の撮った早大生」、秋季展「早稲田の青春 東京専門学校第二回得業生 廣井一の軌跡」と受贈資料展を開催しており、aについて、春季企画展、受贈資料展、秋季企画展の三つを基本とするというかたちが定着して、以後、現在に至る。

一方、常設展については、創立一二五周年を記念して大隈記念室（常設展示室）のリニューアルがすすめられ、二〇〇七年一〇月に新規開設した。こうして、二〇〇七年度は、「常設展大隈重信」と、春季企画展「荒ぶる魂―大西鐵之祐と早稲田ラグビー」、受贈資料展、創立一二五周年記念企画秋季企画展「校歌誕生―早稲田大学校歌制定一〇〇周年記念」の三企画展となった。bについては、私立大学研究フォーラムが開催されただけである。

二〇〇八年度は、春季企画展「没後三三年 ルポライター児玉隆也三八年の軌跡」、秋季企画展「ワセダとオキナワ 第七代総長大浜信泉とその時代」を開催したが、この年度は、bとして、大隈重信生誕一七〇周年記念、秋季企画展関連、大学史資料センター創立一〇周年記念の三講演会と、私立大学研究フォーラムも開催している。

二〇〇九年度は、aの春季企画展「最後の早慶戦―三番レフト近藤清二四年の生涯」、秋季企画展「西村眞次と早

稲田史学」を開催し、bではデジタル文書の管理・保存に関する講演会を開催した。他方、この年度からオープン教育センター設置科目として「早稲田学」を開設し、学生に対して「創設者大隈重信」と「近代史の中の早稲田大学」の二つの講義（二単位）を春季と秋季に各一科目、一五回ずつ講義することとなった。また、オンデマンドでの「早稲田大学基礎講義」の配信を開始した。こうして、この年度から自校史教育も担当することとなったのである（「早稲田学」の開講は、以後、基本的に同じ方式をとっており、他方、オンデマンド講義は二〇一〇年度から新入生向け教育プログラム「わせたライフABC」のなかの「早稲田の歴史を学ぶ」となって現在に至る）。

### （3）二〇一〇～二〇一四年度―『大隈重信関係文書』の編纂推進と百五十年史の編纂開始

資料センターでは、二〇一〇年度も従来業務を引き続き展開し、春季企画展「没後五〇年―浅沼稻次郎とその時代」、秋季企画展「早稲田四尊生誕一五〇周年記念 高田早苗」を開催したが、この年度が重要な意味をもつのは、二〇一〇年三月二十九日付で早稲田大学百五十年史編纂準備委員会報告が提出され、これをうけて百五十年史編纂が早稲田大学の事業として正式にスタートし、資料センターがその事務を担うこととなったからである。同年六月一日、「早稲田大学百五十年史編纂委員会」が設置され、設置要綱の第八条で「委員会の事務は、大学史資料センターが行う」と規定された。そして、同年七月、第一回の編纂委員会が開催され、編纂委員会のもとに専門委員会が設置された。以後、百五十年史の構想・構成や編纂日程、資料調査の段取りなどについて、専門委員会が検討をすすめ、これを踏まえて編纂委員会で審議するというかたちで、事業計画の内容を詰めていくこととなった。

二〇一一年度は、東日本大震災が発生したため春季企画展を延期（事実上中止）し、秋季企画展では、前年度の高田早苗について、「早稲田四尊生誕一五〇周年記念 天野為之と早稲田大学」を開催した。また、授業などのほかに、

この年度から他機関の企画・事業との連携・協業業務を協力事業として位置づけ、佐賀市大隈記念館の大隈祭、高知県宿毛市梓会の梓立祭への講師派遣などを行って、現在に至っている。そして、新たに早稲田大学百五十年史編纂の事業推進と在学生に対する早稲田大学史の教育にあたる助教一人が配置されることとなった。百五十年史編纂と自校史教育の比重がよいよ大きくなってきたのである。

他方、大学レベルでは、理事会が二〇一一年十二月、「Waseda Vision 150」策定に向けた基本的な考え方を示し、早稲田大学創立一五〇周年（二〇三二年）へ向けてのビジョンを明らかにした。このVision実現の柱となる一三の核心戦略の六番目には、「早稲田らしさと誇りの醸成をめざして—早稲田文化の推進」が掲げられ、「早稲田大学百五十年史編纂」はこの第六の核心戦略のなかに位置された。

二〇一二年度は、春季企画展では、前年度延期の「戦地に逝ったワセダのヒーロー—松井栄造の二四年」を開催し、秋季企画展では、早稲田大学創立一三〇周年記念「大隈重信と小野梓 建学の礎」を開催して、あわせて企画展連携講演会「建学の礎を見つめ直す—大隈重信・小野梓と東京専門学校」を開催した。

二〇一三年度は、春季企画展で前年に引き続き戦争を扱い、「ペンから剣へ—学徒出陣七〇年」を、秋季企画展では前年からの連続として、教旨制定一〇〇年「大正デモクラシー期の早稲田」を開催した。また、資料センターの業務として戦争体験の聞き取り調査に取り組むこととし、同年度秋から、繰り上げ卒業や学徒出陣による従軍経験がある校友に対する聞き取り調査を進め、現在に至っている。

二〇一四年度は、春季企画展で「世界への跳躍、限界への挑戦—早稲田スポーツの先駆者たちとその時代」を、秋季企画展では三年目の大学史連続企画として「十五年戦争と早稲田」を開催した。また、校友会や各地域・機関との連携を強化し、展示パネルの提供など、展示企画の有効活用をはかった。



以上のようにこの時期、資料センターでは春季企画展で戦争・スポーツを取り上げ、秋季企画展で早稲田大学の創立者や大学の歴史を追ってきた。そして、『大隈重信関係文書』の刊行事業を鋭意推進しつつ、百五十年史編纂と自校史教育を重点化していった。

こうして、冒頭に述べた①大学の歴史を明らかにすること(A)、②創設者・関係者の事績を明らかにすること(B)、③比較大学史研究(D)に加えて、A・Bを踏まえた教育活動(E)にも重要な役割を果たすこととなった。そして、百五十年史編纂事業の本格化によって、ふたたび年史編纂(C)が重要業務となったのである。

## 二 大学史資料センターの今後

(1) 『大隈重信関係文書』から『早稲田大学百五十年史』へ

資料センターは、業務「一」にかかわって、多くの資料・文書の受人をおこない、その整理・保存を行なうとともに、業務「四」の立場から、公開・利用の促進をはかってきた。業務「二」については、その成果を『早稲田大学史記要』に発表するとともに、創立一二五周年記念事業の一環として、二〇〇四年一〇月より『大隈重信関係文書』全一一巻の翻刻・出版を開始し、以来年一回のペースで刊行してきた。これは、業務「四」ともかわり、学術的・社会的に極めて大きな意義をもつものとなった。さらに、業務「三」については、創立一二五周年を記念する大隈記念室(常設展示室)の開設に従事して、二〇〇七年一〇月の展示開始以後、その管理にあたり、春・秋の企画展を中心に展覧会を開催して、随時、記念講演会やシンポジウムを開催してきた。そして、二〇〇九年度からは「早稲田学」を開設し、自校史教育に重要な役割を果たすこととなった。そして、二〇一〇年度からは、百五十年史編纂

事業が正式にスタートし、資料センターがその事務を担うこととなった。

なお、二〇〇七年度、文化推進部が設置され、そのもとで業務展開をはかることとなった。二〇一一年度以降の資料センターの業務・活動の概況については、各年度の『文化推進部年報』を参照されたい。

ところで、「創立一二五周年記念事業（ソフト面）の中心を成すもの」（白井克彦総長〈当時〉の「発刊の辞」として、資料センターが編集にあたってきた『大隈重信関係文書』は、二〇一四年度をもっていよいよ全一巻が完結する。収録した書翰は当初予定の六千通をはるかに上回って、約七四〇〇通に及ぶ。一二年間を越えるこの翻刻・出版事業に携わった編集担当者は、人事異動等による途中交替もあって一九人に及んだが、各巻九〜一〇人体制で編集にあつたから、全巻を通算すれば編集担当者は延べで一〇〇人を越えることになる。解読・翻刻、年代推定、所蔵・所在調査など、編集に際しての実務スタッフの奮闘は、並大抵ではなかったといえる。また、全巻の編集・発行にあつて多大なご支援、ご尽力をいただいたみず書房に、この場をかりてあつくお礼申し上げます。

それにしても痛感するのは、史料情報の集積と情報公開の画期的進展、とくにデータベース化とデジタル情報の威力である。かつては不可能に近かった年代推定や事実確定作業が、かなりの精度・確度をもって迅速になしうるようになった。編集スタッフは、図書館・資料館等に足を運ぶとともに、新聞記事のデータベースや、各種史料のデジタルアーカイブズをフルに活用することによって編集作業をすすめた。

他方、二〇一一年一二月、「Waseda Vision 150」の策定によって、『早稲田大学百五十年史』は早稲田大学の長期計画のなかに位置づけられることとなった。こうして、資料センターが担ってきた編集業務の中心は、二〇一五年度をもって『大隈重信関係文書』から百五十年史に移行し、百五十年史編集業務が本格化することになる。

百五十年史の編纂については、二〇一一年一二月の編纂委員会において、①編纂準備委員会報告を踏まえて編纂を

進めること、②新しい時代に対応した新しい年史の編纂をめざし、データベース化・Web版等の充実を同時進行させて、編纂を進めること、③大学史資料センターの機能に即した推進をはかり、編纂のプロセスを重視すること、早稲田学等との連携をはかって自校史教育の推進に役立て、また、アーカイブズ機能を確立するための推進力とするのと、の三点が基本方針として確認された。

百五十年史は、この基本方針にもとづいて、二〇一五年度から第一巻の執筆・編集に着手しつつ、第二巻以後の準備をすすめ、各巻それぞれ執筆・編集から刊行までに六年間を確保して、二〇二〇年度に東京専門学校の開校（一八八二年）から旧制大学期（二九四九年）までを扱う第一巻、二〇二六年度に一九四九年以降の新制大学期を扱う第二巻を刊行し、創立一五〇周年の二〇三二年、一九九〇年前後（大学設置基準の大綱化）以降を扱う第三巻の刊行をもって完結する。文字通りの遠大な事業である。もちろん、この全過程を通じて、基本方針②に即して資料集等の編集・公開事業が展開され、基本方針③に即して自校史教育の推進とアーカイブズ機能の確立が追求されることになる。

## （2）研究機能と教育機能・社会発信機能の強化

「Waseda Vision 150」は、その一三の核心戦略の六番目、「早稲田らしさと誇りの醸成をめざして―早稲田文化の推進」でつぎのように述べている。

早稲田大学は、教旨のもとに積み重ねてきた歴史と伝統を通して、日本社会とその文化に貢献してきた。その積み重ねは、しばしば早稲田らしさ、あるいは早稲田文化と称され、卒業生の、在学生の、教職員の、そして広く早稲田関係者の誇りを形成してきた。早稲田らしさは、早稲田の地で生成・蓄積がなされたが、同時にその精神と活動は、日本の隅々に向けられ、また当初から日本を超えて世界に向かっていった。早稲田文化の強力な推進を通して、新たな文化の創成に寄与し、人類への貢献を

なすための戦略とその実現のための方策について考える。このことは、早稲田の誇りの醸成について考えることでもある。

「Waseda Vision 150」の原点にすえられているのは、「早稲田大学教旨」である。「教旨」は早稲田大学の歴史のなかで生まれ、早稲田大学の歴史のなかを生きてきた。歴史的な省察を欠いた「教旨」の称揚は空語に等しい。また、「早稲田らしさ」は重ねてきた歴史に根ざす。歴史を軽んじた「らしさ」と「誇り」は空疎である。「Waseda Vision 150」に的確に対応するためには、資料センターの機能強化が不可欠である。

第一に、百五十年史編纂の中心業務化に対応するためには、研究機能の強化が必要である。『大隈重信関係文書』の編纂を踏まえて大隈研究の新展開を期すとともに、早稲田関係者に関する研究の深化・発展をはかることは、「早稲田らしさ」の探究にとって欠かせない。その意味で、資料センター発足期の研究プロジェクト推進活動を総括しつつ、新たな水準で、再度、展開していくことが必要となってくる。「大学史研究センター」的機能の強化である。

この点では、慶應義塾の福沢研究センターに学ぶ必要がある。同センターは、一九八三年、塾史資料室を発展改組して発足した。①福沢諭吉の思想・業績に関する研究、②慶應義塾の歴史、福沢門下生や義塾関係者の活動・事績に関する調査・研究、③福沢諭吉・慶應義塾関係資料の収集・整理・保管・展示、④福沢諭吉・慶應義塾に関する研究成果をふまえた教育、の四つを目的として設置されており、「慶應義塾内の諸学部・一貫教育校（小中高などの諸学校）の枠を越えた全塾的な共同研究機関として位置づけられ、義塾内外の研究者とも隔てなく連携しながら活動」している（同センターのホームページによる）。その設置場所は、慶應義塾の象徴ともいえる三田キャンパス内の慶應義塾図書館旧館（重要文化財）である。そして、現在、研究職として、専任の教授と准教授、各一人が配置されている。

第二に、百五十年史編纂を単なる年史編纂事業にとどめることなく、その編纂事業を通じて早稲田大学の歴史に関

する教育機能・社会発信機能を強化していくことが重要である。在学生に対しては、現在の「早稲田学」を発展させ、より総合性を高めた「早稲田史教育プロジェクト」のようなものを編成・展開することを展望したい。

他方、現在、資料センターは、大隈記念室（常設展示室）の管理にあたるとともに、春・秋の企画展を中心に展覧会を開催しているが、早稲田大学には、常時、大学の歴史にふれることができる大学史の展示施設がない。また、建学の最大の功労者小野梓をはじめ、高田早苗・天野為之らの事績を明らかにする展示もない。このような嘆かわしい状況のもとで、学生・教職員がはたして早稲田大学が積み重ねてきた歴史と伝統をきちんと知ることができるだろうか。はなはだ疑問である。いつでも、誰でも、早稲田の歴史に身近に触れ、その伝統を「体験」できるような常設の展示施設として、早稲田史の博物館（たとえば、現在の大隈記念室を拡充した「大隈記念 早稲田史ミュージアム」のような施設）の開設を展望したい。資料センターが重ねてきた前述のような各種の企画展の成果と蓄積がここに集約され、早稲田の歴史に関する教育と社会発信に有効に機能するに違いない。

その設置場所としては、早稲田大学の象徴的空間がふさわしい。京都大学の歴史展示室は、百周年時計台記念館に置かれている。明治大学の大学史展示室は、駿河台アカデミーコモン（明治大学博物館）内に設置されており、創立者や教職員・学生・校友に関する多彩な資料を常設展示するとともに、授業や学生寮の体験・再現コーナーや活躍する卒業生らの校友紹介コーナーなどを用意している（同センターのホームページによる）。学習院アーカイブズは、一九〇九年に図書館として建てられた建物（国登録有形文化財）を使用している。

### （3）アーカイブズ機能の強化

第三に、百五十年史の編纂を成功させるためにも、以上の研究機能・教育機能を保証するためにも、アーカイブズ

機能の強化が欠かせない。とくに大学資料の受入れ・整理・公開機能の充実が重要である。この点では、国立大学の文書館が参照軸となる。主要な国立大学は文書館等を設置して、「公文書等の管理に関する法律」（公文書管理法、二〇〇九年法律第六十六号）にもとづく機関（国立公文書館等）としての業務を展開しているからである。以下、各大学の当該施設ホームページによってその状況を概観してみることにする。

東北大学では、一九六三年七月、日本初の大学アーカイブズ「東北大学記念資料室」を設置した。また、金沢大学でも、一九八九年四月、同大学に関する文書・資料を収集し、整理・保存等を行い、閲覧・公開等の利用に供することを目的として、「金沢大学資料館」を設置した。しかし、本格的な大学文書館は、二〇〇〇年一月に設置された京都大学の「京都大学大学文書館」が日本初である。

京都大学大学文書館設置の契機は、「行政機関の保有する情報の公開に関する法律」（情報公開法、二〇〇一年四月施行）と、『京都大学百年史』刊行の終了（二〇〇一年三月）にあるという。同館は、公文書等の管理に関する法律（公文書管理法）にもとづく特定歴史公文書（保存期間が満了した法人文書のうち歴史資料として重要なものなど）や、その他、京都大学の歴史に係る各種の資料の収集・整理・保存・閲覧及び調査研究などを行うことを目的として設置され、①資料の受入・整理・公開、②調査研究活動、③広報教育活動、を展開している。①については、学内の事務本部・各部署が作成・收受し、歴史資料として重要なものと判断された移管法人文書、卒業生・元教職員など京大に関わる個人やクラブ・サークルなどの団体所蔵の資料を受け入れ、「特定歴史公文書等」として整理・公開している。また、学内発行の各種刊行物（広報誌、入学案内、履修案内、点検評価報告書など）の受入・整理・公開も行っている。②としては、アーカイブズ論と大学史・高等教育史に取り組み、③については、百周年時計台記念館一階の歴史展示室での、常設展「京都大学の歴史」・「第三高等学校の歴史」と、企画展・テーマ展の制作・運営にあたっている。さらに、全学共

通科目「京都大学の歴史」の開講のほか、年二回の新採用職員研修でも京都大学の歴史について講義を実施しているという。同館には、現在、専任教員として、教授一人、助教二人が配置されている。

東北大学でも、二〇〇〇年一二月、情報公開法の施行を機として東北大学記念資料室を「東北大学史料館」に改組し、より本格的な大学アーカイブズとしての業務を展開している。同館は、保存期間を満了し移管された大学の歴史公文書、および公文書に準じる性格を有するその他の資料の保存・公開等を行う公文書室と、退職教員・卒業生その他の個人等からの寄贈資料を中心とする多様な資料の保存・公開等を行う記念資料室の二つの「室」を設けている。二〇〇六年からは、総合学術博物館・植物園とともに「東北大学学術資源研究公開センター」の業務組織となった。現在、専任教員として、准教授一人、助教二人が配置されている。

つづいて広島大学も、二〇〇四年四月の国立大学法人化とともに、学内共同教育研究施設として「広島大学文書館」を設置した。同館は広島大学のアーカイブズとして、広島大学が活動の過程で作成・受領・収集した記録のうち、継続的価値を持つとして保存されているものを管理・保存して利用に供するとともに、元文相・初代広島大学長森戸辰男に関する資料をはじめ、広島大学に関係する人物の記録等を収集・保存している。さらに、それらの資料を活用した教育活動として、教養的教育（総合科目）「広島大学の歴史」の講義を開講して、学生が大学の一員としてのアイデンティティを形成する機会を提供し、また、公開講座を企画するなど、保有する資料を活用した研究成果を社会還元しようとしている。同館には、公文書室と大学史資料室が置かれ（二〇一一年一月から法人本部一階に公文書分室を設置）、現在、専任教員として、准教授一人、助教二人が配置されている。二〇一四年度からは、広島大学の機関アーカイブズとして、大学全体の公文書管理を担当することになった。今後、広島大学の重要な法人文書を一元的に管理し、整理・公開していくことになるという。

同じく二〇〇四年四月には、名古屋大学の「公文書館」的機能と「歴史資料館」的機能をあわせ持つ大学アーカイブズとして「名古屋大学文書資料室」が設置され、九州大学でも九州大学史料室の改組により「九州大学大学文書館」が設置された。九州大学大学文書館の機能・活動は、①大学の管理・運営に関する記録や教育・研究活動の記録等、大学に関わる様々な資料の収集・整理・保存・公開、②収集資料の調査・分析と、それにもとづいた大学史、大学論、大学アーカイブ等の研究、③大学史・大学論等についての授業や九州大学の歴史に関する授業、④九州大学の歴史をはじめ、大学に関する各種の情報を学内学外に対して提供するなどの情報提供・教育・刊行、⑤九州大学百年史の編集（二〇〇九年より館内に九州大学百年史編集室を設置）の五領域にわたる。現在、専任教員として、教授一人、准教授一人、助教一人が配置されている。

二〇〇五年五月には、「北海道大学大学文書館」が共同教育研究施設として設置され、現在、助教一人が配置されている。二〇一〇年四月には、神戸大学のアーカイブズとして、「神戸大学文書史料室」が同大学附属図書館に設置された。二〇一二年四月には、東京外国語大学でも「大学文書館」が発足し、同年一〇月には、大阪大学に法人文書資料部門と大学史資料部門の二部門をもつ「大阪大学アーカイブズ」が設置され、准教授一人が配置されている。二〇一四年四月には、「東京大学文書館」も設置された。

過去の歴史は様々な資料によつて検証され、それを通じて再現される。アーカイブズこそは、大学の記憶装置である。過去の記憶を失った未来は危うい。「早稲田大学アーカイブズ」のような大学文書館を念頭において、資料センターの将来像を描いてみたい。

大学史研究、早稲田関係者に関する研究の深化・発展をはかること（「大学史研究センター」、早稲田に関する文書



館機能と博物館機能を強化し（「早稲田大学アーカイブズ」と「早稲田史ミュージアム」）、教育機能をさらに發揮すること（「早稲田史教育プロジェクト」）。これらを資料センターの〴〵これから〴〵に展望しつつ、鋭意、百五十年史編纂事業の推進に取り組んでいくことにしたい。多くの在学生・教職員が常に接することができる施設として、また、多くの校友が「心のふるさと」として気軽に訪れることができる施設として、そして、国内的にも、国際的にも、多くの利用者がいつでも利用できる施設として、資料センターがその存在意義を發揮するためには、「早稲田らしさ」を「生成・蓄積」してきた「早稲田の地」こそが、その設置場所にふさわしい。